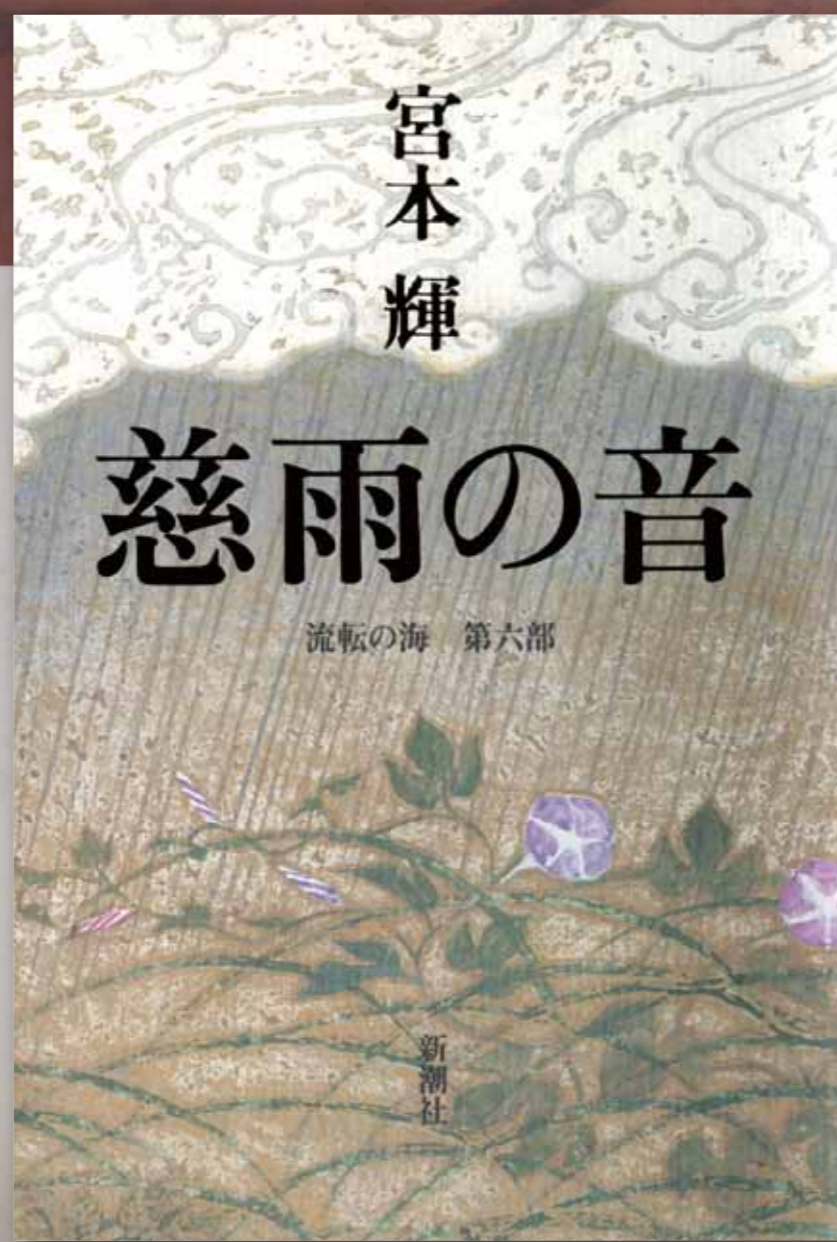


慈雨の音

慈雨の音

「見えたに決まっちゃう。
冬の暗がりのなかの鯉のぼりは、
あいつらの心から消えんぞ。
お前が振りつづけた鯉のぼりじゃ」



2011年 新潮社

「Story

大阪市福島での駐車場管理人としての仕事も順調に進み、家族三人が平和に暮らすなか、妻・房江の心配もよそに、松坂熊吾は再び事業をはじめようと中古車販売店を開業する。熊吾の豪快な事業への取り組みに房江は心労をつのらせ、せつなく断っていた飲酒を再びはじめてしまう。まわりでは、城崎に住む浦辺ヨネの死、蘭月ビルに住んでいた月村兄妹の北朝鮮行き、過去に熊吾に仕えた海老原太一の自死など、多くの別れが訪れる。病弱で小さかった伸仁も中学生となり、大人たちや友人との間に起こるさまざまなもめごとや熊吾と初めて鑑賞した能で幽玄の世界を経験するなどして、心身ともに大人へと成長してゆく。

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個人的な人達を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心に描かれる世界から、息子の目を通した物語へと変わってゆく。

『流転の海』(流転の海 第一部) 福武書店1984年7月・新潮社1992年11月
『地の星』(流転の海 第二部) 新潮社1992年11月 / 『血脈の火』(流転の海 第三部) 新潮社1996年9月
『天の夜曲』(流転の海 第四部) 新潮社2002年6月 / 『花の回廊』(流転の海 第五部) 新潮社2007年7月
『慈雨の音』(流転の海 第六部) 新潮社2011年8月 / 『満月の道』(流転の海 第七部) 新潮社2014年4月
現在、『新潮』(新潮社)にて、第八部である『長流の畔』が連載中。(2015年11月現在)



弱者を守る

中学生になった伸仁が両親の助けを借りずに行動し、むしろ父や母に意見するほど成長していることに驚いた。目のあかない子犬や病気の鳩のひなを必死に育てる姿は、兄弟のいない伸仁に、今まで自分が父母に守られていた恩返しをしているように感じた。

Review